

うぐひす

— 季語溯源 —

小林 祥次郎

UGUISU — How the Japanese have thought about it —

Shojiro KOBAYASHI

1 鶯という字

中国での鶯という漢字について、『大漢和辞典』には、「かうらいうぐひす。てうせんうぐひす。小鳥の名。形は普通のうぐひすよりも大きく、体は黄色で羽及び尾は黄黒相まじる。雌雄ならび飛んで、機を織るやうな声を出して鳴く。」として、倉庚・黄鳥・春鳥・金衣公子など十九の別名をあげている。

そんなわけで、鶯はウグイスではないのであるが、『万葉集』では、「鶯」と漢字で記したものと、「于具比須」などと音仮名で記してあるものとの間には違いがないようである。すでに奈良時代には、鶯をウグヒスとしていた。

日本のウグイスは黄色とは言い兼ねるが、日本漢詩文には、

暗に黄鳥の稍相催すを知る 有智子内親王（経国集・一一・賦

新年雪裡梅花）

黄鶯雑沓誰か媒を求めむ 滋野貞主（同・臨春風傲沈約体応制）など詠んだものがある。これらは中国文学に見える語を用いて日本のものを表そうとしているのである。

中国文学では、枝を飛び移って鳴く鶯を「流鶯」という。日本漢詩文にも、

流鶯音を知り、契を妙舞の前に叶ふ 紀在昌（扶桑集・九・北堂漢書竟宴詠史得蘇武并序）

のように用いたものがある。日本でも飛び移るウグヒスをもてはやさないわけではないが、これは中国文学の表現に倣って、日本のウグイ

スを詠んでいるのである。

2 春を告げる鳥

霞立つ野の上の方に行きしかば鶯鳴きつ春になるらし

丹比乙麻呂（万葉集・八・一四四三）

ウグヒスが鳴いたので春になったと感ずるのである。「春さればまづ鳴く鳥の鶯」（万葉集・一〇・一九三五）と詠んだ歌もある。ウグヒスは春を知らせる鳥となっている。

中国ではどうか。『礼記』（月令）の「仲春之月」の条に「倉庚鳴」とあり、これによれば、倉庚（鶯）は二月のものということになる。多くを調べたわけではないが、漢詩文では鶯を春のものとするが、必ずしも初春のものということでもないようである。しかし、円仁の『入唐求法巡礼行記』の開成四年（八三九）正月十四日の立春の記事に、「市人は鶯を作りて之を売る。人は買ひて之を翫ぶ」とある。中国でも立春に鶯をもてはやすことがあったことになる。中国でも鶯は春を告げる鳥なのである。

『万葉集』以来のウグヒスを春のものとする感じ方には、中国の影響があるのであろうか。ウグイスが早春に鳴くのは、日本では普通のことである。日本人は初めからそう感じていたと考えたい。中国の考え方が入ってきて、日本人は抵抗なく受け入れられたのであろう。

『古今集』以後でも同じように、

春来ぬと人は言へどもうぐひすの鳴かぬ限りはあらじと思ふ

小林 祥次郎

壬生忠岑（古今集・春上・一一）
など詠んでいる。連歌の発句にも、

うぐひすの初音に春は立ちにけり

藤原秀能（菟玖波集・発句）

などある。俳諧では、『大子集』の春上の元日の箇所に、

鶯や梅に推参今日の春 春可

など三句あるのを初めとして、諸書に元日・立春の箇所に見える。

3 花を惜しむ

『万葉集』では、

梅の花散らまく惜しみ我が園の竹の林に于具比須鳴くも

阿氏奥島（万葉集・五・八二四）

など、ウグヒスを梅の花の散るのを惜しむものとしている。

宇具比須の鳴き散らすらむ春の花いつしか君と手折りかざさむ

大伴家持（万葉集・一七・三九六六）

も、二月二十九日の作であるから、少し遅いがやはり梅であろう。

ところが、『古今集』では、春下の部に、

待つ人も来ぬものゆゑにうぐひすの鳴きつる花を折りてけるかな

詠み人知らず（古今集・春下・一〇〇）

以下、ウグヒスが、花の散り春の過ぎ行くのを惜しむと詠んだ歌が九

首ある。『古今集』の場合は、春の末の歌であるから、この花は桜と

思われる。『寛平御時后宮歌合』に、

霞立つ春の山辺に桜花飽かず散るとやうぐひすの鳴く（二五）

とあるのは、その例証となる。

鶯が花を惜しむということは、『白氏文集』にもある。

惜しむべし鶯啼きて落花の処 一壺の濁酒残春を送る（五六・快

活）

（『白氏文集』は那波道円本による。巻数はこれのもの）

これは『千載佳句』（送春・一一一）にも小異ある形で引用してあり、

王朝文学者の知るところであつたと思われる。さらに古くは、

含桃落花の日 黄鳥宮飛の時（玉台新詠・一〇・梁武帝・夏歌四

首）

のような、落花と鶯とを取り合わせたものがある。中国のことである

から、この花は桜ではないはずであるが、日本の文学者たちは、この取り合わせを中国の詩歌から教えられたのであろう。

以後の勅撰和歌集では、この惜春のウグヒスはあまり多くない。八

代集では、『後撰集』に一首（一〇二）、『拾遺集』に二首（四二四、

一〇六四）、『詞花集』に一首（三五七）、『千載集』には『拾遺集』

（二〇六四）の歌の異形（二〇五八）、『新古今集』に一首（一〇九）。

先の寛平御時后宮歌合のもの）あるだけである。歌の材料として、あ

まり好まれなくなったのであろうか。

4 晩春・初夏

鶯は好語を収め樹は粧を凋ふ 老いに向かひて驚傷す歳芳の過ぐ

るを（田氏家集・上・三月晦日送春感題）

初めて谷を出でしより人に憐ればる 春色尽くる時自づから黙然

たり（菅家文草・五・鶯）

などあるように、春の終わりにには、鶯は鳴かなくなるとしている。和

歌の世界でも、醍醐天皇の時に、「四月一日、うぐひす鳴かぬよしの

歌詠めと仰せらるる」ことがあつた。（公忠集・七・詞書。大和物語・

一三一にも）。知識としては、ウグヒスは夏には鳴かなくなるのであつ

た。

しかし、ウグイスは春にばかりいるわけではない。『万葉集』には、

鶯の通ふ垣根の卯の花の憂きことあれや君が来まさぬ（万葉集・

一〇・一九八八）

は夏相聞で、初夏の卯の花と取り合わせてある。

平安時代になつてからでも、漢詩文では、『菅家文草』（四）の「首

夏聞鶯」という詩に、「四月の鶯の声は聴き甚だ訛れり」という一行

がある。

和歌では

卯の花を散りにし梅に紛へてや夏の垣根にうぐひすの鳴く

平公誠（拾遺集・夏・八九）

谷の戸を閉じやはてつるうぐひすの待つに音せで春の暮れぬる

藤原頼通（三奏本金葉集・雑上・五〇八）

など、晩春や夏のウグヒスを詠んだ歌もないわけではない。

『蜻蛉日記』で、ウグヒスが現れるのは次の箇所である。

天曆九年（九五五）正月 京都の自宅での歌の贈答。

安和二年（九六九）六月 京都の自宅で春の末を回想しての長歌。

天禄元年（九七〇）六月 京都の自宅での述懐の歌。

天禄二年正月元日？ 自宅。

天禄二年六月 鳴滝般若寺。

天禄三年正月二十三日 自宅。

天禄三年二月末 自宅。

天禄四年（天延元年）（九七三）正月三、四日 自宅。

天延二年正月 自宅で述懐の歌。

天延二年二月二十日過ぎ 奥山でウグヒスが聞こえない。

同書は、ノン・フィクションで実体験を描いているので、季節はずれと思われるような場面にもウグヒスは出てくる。ちなみに、『源氏物語』はフィクションであるから、ウグヒスは、春のそれにふさわしい箇所には描かれていない。

清少納言は、

うぐひすは、夏・秋の末まで老い声に鳴きて、むしくひなど、
ようもあらぬ者は名を付け変へて言ふぞ、くちをしくくすしき心
地ぞする（枕草子・四一）

と、ウグヒスを貶めている。

中国の詩文には、鶯を暮春の景物とするものとして、『文選』に、

暮春三月に、江南に草長じ、雑花樹に生ひ、群鶯乱れ飛ぶ（四三）

与陳伯之書、丘希範）

とあり、『白氏文集』にも、

一春惆悵す残ること三日なるを 酔ひて周郎に問ふ憶ひ得るや無しや 柳絮は人を送り鶯は酒を勧む 去年の今日東都に別れき
（五四・三月二十八日贈周判官）

という詩がある。『白氏文集』には、

残鶯一声春日長し（四・牡丹芳）

冉冉として三月尽き 晚鶯城上に聞こゆ（八・南亭対酒送春）

など、残鶯（八例）・晚鶯（一例）という語がある。初夏の鶯も、

残鶯意思尽き 新葉陰涼多し（九・青龍寺早夏）

のような例がある。さらに古く、先に引いた

含桃落花の日 黄鳥鶯飛の時（玉台新詠・一〇・梁武帝・夏歌四首）

は、題に「夏歌」とある。

うぐひすや竹の子藪に老を鳴（炭俵）

芭蕉が『白氏文集』の「老鶯」という語に興味を感じて詠んだ句という（十論為弁抄）。これも初夏の鶯である。蕪村にも、

老鶯児 春もや、あなうぐひすよむかし声（夜半楽）

という句がある。ところで、平岡武夫・今井清『白氏文集歌詩索引』、
樂貴明ほか『全唐詩索引 白居易卷』を検して、老鶯のみならず、一句の中に鶯と老とがあるのは一行も見当たらなかった。芭蕉は何を見たのであろうか。ちなみに『佩文韻府』にも老鶯という熟語は見えない。しかし、日本漢詩文に、

樹花半ば落ち林鶯老ゆ（田氏家集・中・残春宴集）

花已に凋み零ち鶯も又老ゆ（菅家文草・六・三月三日侍朱雀院柏

梁殿惜残春…）

などあることから考えると、鶯に老という語を用いる表現は、中国文学からのものである。和歌では、

三月つごもりに和歌七首せしに うぐひすの鳴く音に老いを比
ぶればまた初声の心地こそすれ（大式高遠集・一五八）

が最古の例であろうか。あまり例は多くない。

近世の歳時記類では、北村季吟の寛文三年（一六六三）成立『増山井』以下に、五月の季語として、「鶯音を入る」を載せている。

5 梅との配合

ウグヒスと梅とは、すでに『万葉集』に十首あり、最も多い取り合わせになっている。

梅の花散らまく惜しみ我が園の竹の林に于具比須鳴くも

阿氏奥島（万葉集・五・八二四）

梅の花咲ける岡辺に家居れば乏しくもあらず鶯の声（万葉集・一〇・一八二〇）

この取り合わせは『懷風藻』にもある。

素梅は素髻を開き 嬌鶯は嬌声を弄ぶ 葛野王（春日翫鶯梅）
陳の江総の詩「梅花落」に「梅花密なる処に嬌鶯を蔵す」（『芸文類聚』八六・梅）とある。現実にウグイスが花の蜜を吸うこともあったろうが、これも中国文学から教えられた取り合わせであつたのである。

『万葉集』では、右の「梅の花散らまく惜しみ」のように、梅の花の散ることを読むこともある。

鶯の木伝ふ梅のうつろへば桜の花の時かたまけぬ（万葉集・一〇・一八五四）

桜より前に梅は散り、それをウグヒスは惜しむのである。

平安時代以後では、漢詩に、

紅英落つる処鶯乱れて鳴く 嵯峨天皇（凌雲集・神泉苑花宴賦落花篇）

とあるのは、二月の作であるから、散るのは紅梅の花であらうか。

和歌では、

梅の花散るてふなへに春雨のふりてつつ鳴くうぐひすの声 詠

み人知らず（後撰集・春上・四〇）

のような例がないわけではないが、少なくなる。（『古今集』の花の散るのを惜しむというのは、先に記したように、桜の花と見たい。）

平安時代になつても、梅を取り合わせる詩歌は多い。和歌では次項に述べるように、雪を梅の花に見立てることも行われる。

鶯や梅にとまるはむかしから 鬼貫（婦多津物）

近世には、梅との取り合わせは、常識となつていたようである。

6 雪との配合

ウグヒスに雪を取り合わせることもある。

み雪降る冬は今日のみ鶯の鳴かむ春へは明日にしあるらし

三形王（万葉集・二〇・四四八八）

のように、冬で雪が降っているからまだウグヒスは鳴かないとする歌もあるが、

うち霧らし雪は降りつつしかすがに我家の園に鶯鳴くも

大伴家持（万葉集・八・一四四一）

のように、春になつて雪の中にウグヒスが鳴いているとするものが多い。

『古今集』では、

梅が枝に来るうぐひす春かけて鳴けどもいまだ雪は降りつつ

詠み人知らず（春上・五）

のような、単なる取り合わせの歌もあるが、

春立てば花とや見らむ白雪のかかれる枝にうぐひすの鳴く

素性法師（春上・六）

のように、雪を梅の花に見立てることもある。同じことを詠んでも、『万葉集』では、

梅が枝に鳴きて移ろふ鶯の羽根白妙に沫雪そ降る（一〇・一八四〇）

のようなもので、見立ててはいない。

中国文学にも、『玉台新詠』に、

春雪を舞はし 流鶯を雑らはしむ 沈約（九・臨春風）

雪罷れば枝即ち青く 氷開けば水便ち緑なり 復た黄鳥の声を聞く 全く相思の曲を作す 王僧孺（一〇・春思）

など、鶯と雪とを取り合わせた作があり、『千載佳句』（早春）には、章孝標の

雪晴れて山色客を勾留し 風暖かにして鶯声春を計会す（述懷上元相公）

が載っている。日本でもこの取り合わせを実際に体験することはあつたであらうが、それに美を感じて詠むことは、中国文学から教えられたのであらう。

7 竹との配合

梅の花散らまく惜しみ我が園の竹の林に于具比須鳴くも 阿氏

奥島（万葉集・五・八二四）

御園生の竹の林に鶯はしば鳴きにしを雪は降りつつ 大伴家持

（万葉集・一九・四二八六）

など、ウグヒスを竹と取り合わせることがある。以後の歌でも、竹近く夜床寝はせじうぐひすの鳴く声聞けば朝寝せられず

藤原伊衡（後選集・春中・四八）
などあり、漢詩文にも

忽ちに竹林の風に値ふ　友を求めて鶯は樹に嫋ひ　香を含みて花は叢に笑まふ　　釈智蔵（懷風藻・翫花鶯）

松竹同じく古きに宜しく　鶯花併つながら状新たなり

賀陽豊年（凌雲集・三月三日侍宴応詔）

などある。

『芸文類聚』（八九）の竹の箇所に載る梁の江洪の「和新浦侯齋前竹詩」の一節に、

籜は紫にして春鶯思ひ　筠は緑にして寒蛩啼く
とあり、『千載佳句』（早春・六）には元稹の「送晏秀才帰江陵」（全唐詩には不載）の、

長堤の織草は河辺に緑に　近郭の新鶯は竹裏に鳴く
が載っている。中国にも鶯と竹との取り合わせがあったことになる。

中世の文献には、富士山と結び付けて、かぐや姫はウグヒスの卵から生まれたとするものがある。『海道記』に、

昔、採竹翁ト云者アリケリ。女ヲ赫奕姫ト云。翁ガ宅ノ竹林ニ、鶯ノ卵、女形ニカヘリテ巢ノ中ニアリ。翁養テ子トセリ。

とあるのははじめ、少しずつ異なる形で、諸書に見える。竹の中から生まれたので、ウグヒスの卵としたのであろう。それは日本の民間の伝承なのか、それとも中国の影響を受けているのか。

8 柳との配合

うちなびく春立ちぬらし我が門の柳の末に鶯鳴くも（万葉集・一〇・一八一九）

以下、『万葉集』巻十には鶯と柳とを取り合わせた歌が三首ある。

日本の漢詩文にも、この取り合わせを詠んだものは少なくない。

春に入りて今幾日ぞ　聞道く数鶯飛ぶと　煙は主人の柳を没し
花は客子の衣に薫ず　　桑原腹赤（凌雲集・春日過丈人山莊探得飛字）

新鶯を聴く　鶯声新しけれども人は惟れ旧る　御柳初めて暖けくして仰げば狎々なり　小野岑守（文華秀麗集・下・奉和聴新鶯）

青糸柳陌鶯歌足り　紅藥桃溪蝶舞新たなり　石上宅嗣（経国集・一〇・三月三日於西大寺侍宴応詔）

中国文学では、鶯は柳と取り合わせるものになっている（青木正児「名物零拾——鶯はウグヒスに非ず」『中華名物考』所収）。中国で、この取り合わせが行われるようになったのは、いつごろからなのであろうか。

『芸文類聚』（九二）の倉庚の箇所には、鶯と柳とを取り合わせている例はない。『文選』の索引で調べても、その取り合わせは見当たらない。『玉台新詠』には、

新鶯は葉に隠れて囀り　新燕は窓に向かひて飛ぶ　柳絮は時に酒に依る　梅花は乍ち衣に入る（七・湘東王繹、和訓上黄）

翻る鶯度る燕雙比翼　楊柳は千条共に一色（九・蕭子顯、春別）
など、鶯に柳と燕とを合わせて詠んだ作があるが、これらは春の景物を列挙しているのであつて、鶯と柳との取り合わせが一般的になつていたというのではないのではないか。

唐の張文成の『遊仙窟』に、

翠柳は眉の色を開き　紅桃は臉の新たなるを乱る　此の時に君在らざれば　嬌鶯人を弄殺せむ

とあるのも、春の景物を並べて、美貌を譬えているのであろう。

『芸文類聚』（八九）の楊柳の条には、

花絮は時に鳥を随へ　風枝は屢ば塵を払ふ（梁簡文帝・詠柳）
葉は密にして鳥飛ぶことを礙げ　風輕くして花落つること遅し（同・折楊柳）

などの詩がある。これらの鳥を鶯と見ることはできるのであろうか。

もっと広く調査する必要があるが、この取り合わせは、唐時代ころからのものなのではあるまいか。初唐の盧照鄰の「折楊柳」に、

倡楼曙扉を啓き　楊柳正に依依たり　鶯啼きて歳の隔たるを知り
条変じて春の帰るを識る（全唐詩・一函九冊）

とあるのが、かなり早い例のようである。『白氏文集』になると、

林鶯は何の処にか箏の柱を吟ずる　牆柳は誰が家にか麴塵を曝せる（白氏文集・五八・天宮閣早春）

（『千載佳句』（四五）、『和漢朗詠集』（一〇二）に載る）など、例は

多くなる。

その時代を考慮すると、日本文学では、先の勅撰三集の例など平安時代のもは、中国文学の影響で鶯と柳とを取り合わせるようになったと見たい。しかし、『万葉集』の場合は、初唐の影響は及んでいないであろうか。この取り合わせが、作者の記載のない歌が多い巻十のみに偏在していて、中国文学の影響を強く受ける大伴旅人や山上憶良あるいは旅人の子である家持などの作に見られないので、影響関係を考えるのはいささか躊躇せられる。『万葉集』の場合は、春を告げる鶯を春に芽吹く柳と合わせて詠んでいると考えるのが、あるいは妥当なのではあるまいか。

平安時代になっても、

妹が家のひいりに立てる青柳に今や鳴くらむうぐひすの声

躬恒（後撰集・春上・四一。躬恒集・三五七は第四句「今は鳴き来む」）

のように、詠まれるが、単に景物としてウグヒスと柳とを取り合わせるものよりも、

青柳を片糸に縫りてうぐひすの縫ふてふ笠は梅の花笠（古今集・神遊びの歌・一〇八一）

を初めとして、柳を糸に見立てて、その糸の縁で詠んだものが多くなる。

柳を糸に見立てることは、中国にも「柳糸」という熟語があるから、これも中国文学の影響なのであろうか。この歌は本来は歌謡である。そういうものに、中国文学の影響は考えられるのであろうか。小西甚一氏は、「全体のおもむきは、智的な技巧がつよいところから見て、あまり古い時代のものではないらしい。」（日本古典文学大系・古代歌謡集）とする。漢詩文との関わりを考えてもよいということであろうか。以後、

鶯の糸に縫るてふ玉柳吹きな乱りそ春の山風 詠み人知らず

（後撰集・春下・一二一）

のように、右の「青柳の」の歌を踏まえたものは多い。

鶯のぬふ花いづれけさのゆき 宗長（三手文庫本壁草）
うぐひすのぬふ花しるしみかさ山 周桂（発句帳）

などの連歌の発句は、この歌を背後に隠して、笠と言わずに梅を言っている。

うぐひすの笠おとしたる椿哉 芭蕉（猿蓑）

は、右の歌の俳諧化である。

柳の糸を縫るといふ歌は、

青柳の糸縫りはへて織る機をいづれの山のうぐひすか着る

伊勢（後撰集・春中・五八、伊勢集・四五七は第二句「糸縫りかけて」）

青柳のはなだの糸を縫り合はせて絶えずも鳴くかうぐひすの声

凡河内躬恒（拾遺集・春上・三四、躬恒集・一一八）

など少なくない。これらも「青柳の」の歌を踏まえているのであろうか。柳と言えは糸と思ひ、糸と言えは縫るとするのは、歌での常識であろう。そうだとすれば、右の二首などは、「青柳の」を踏まえると考えないでよいのではないか。

『今昔物語集』（二〇・五）に、

王照君ガ居タリケル所ニ行テ見給ケレバ、春ハ、柳、風ニ靡キ、

鶯、徒々ニ鳴キ

という描写がある。中国の春の情景として、柳と鶯とを取り合わせるのは常識になっていたのであろう。『今昔』には鶯は四例、柳と取り合わせているのはこれだけである。

9 谷との配合

ウグヒスは谷から出てくるものとされている。『万葉集』には、あしひきの山谷越えて野づかさに今は鳴くらむ宇具比須の声

山部赤人（万葉集・一七・三九一五）

鶯の鳴くら谷にうちはめて焼けは死ぬとも君をし待たむ

平群女郎（万葉集・一七・三九四一）

の二例がある。前者はウグヒスが山や谷の上を飛び越えて来るというのであり、後者はウグヒスの鳴く場所がくら谷（断崖になっている谷の意か）であるという修飾語になっている。必ずしもウグヒスが谷に居てそこから出て来るというのでもない。

漢詩文では

花色花枝を染め、鶯吟鶯谷に新し 春日老（懷風藻・述懷）
 長天の去雁は帰思を催し 幽谷の来鶯は客啼を助く 坂上今繼

（文華秀麗集・上・和渤海大使見寄之作）

など、鶯は谷にいて、そこから出てくるものとしている。菅原道真は、清涼殿で「鶯出谷」という詩を作っている（菅家文章・六）。

歌のほうでは、『古今集』以後、

うぐひすの谷より出づる声なくは春來ることをたれか知らまし

大江千里（古今集・春上・一四）

など、やはりウグヒスは谷から出るものになっている。

漢詩には、春の末に谷に帰ることを詠んだものもある。

纔に見る紅霞は嶺に稀なる色 憐むべし黄鳥は谿に入る声

藤原敦基（本朝無題詩・四・三月尽日惜春）

和歌にも、

谷の戸を閉ぢやはてつるうぐひすの待つに音せで春も過ぎぬる

藤原道長（拾遺集・雜春・一〇六四）

という、四月一日（詞書による）なので谷に籠もつたと詠んだものがある。

鶯と谷とを取り合わせるのも、中国からの知識である。

木を伐ること丁丁たり 鳥鳴くこと嚶嚶たり 幽谷より出でて

喬木に遷る（詩経・小雅・伐木）

この詩には鶯またはその同義の語はない。しかし、六朝、唐代あたりから、これを鶯とするようになった（加納喜光『詩経・下』中国の古典二九）。『古今事文類聚後集』（四五）では鶯の箇所にこの詩を載せる。『白氏文集』には、『千載佳句』（慶賀）にも引く

祥鱸は降つて庭に趨る鯉に伴ひ 賀燕は飛んで谷を出づる鶯に和

す（五五・和楊郎中賀楊僕射致仕後…）

をはじめ、

井の鮒は泉に返らむことを思ひ 籠の鶯は谷を出でしことを悔や

む（一〇・孟夏思渭村旧居寄舍弟）

山静かにして豹隠れ難く 谷幽かにして鶯暫く還る（一三・和鄭

方及第後帰洛下閑居）

などある。

谷の鶯で、世を隠れること、世に容れられない不遇など、それを出て喬木に移ることで、出世することを表すことがある。日本漢詩には、

偏に歡ぶ初めて谷を出づることを 謝し絶つ旧の煙霞を（菅家文章・二・早春侍内宴賦早鶯応製）

などあり、谷という語はないが、

応に同じかるべし鶴の重阜に滞まれる日に 孤り負く鶯の喬木に

遷れる春に（田氏家集・上・看侍中局壁頭挿紙鶯呈諸同志）

も、「鶯遷喬木」で昇進することを言う。

これも先の『詩経』の「伐木」によるものである。この詩がもとになって、鶯が谷間から高木にのぼる意から、転じて榮転の喩えを表す「遷鶯・遷喬」という語ができる。先の『白氏文集』の三例もそれを言っているものであり、『和漢朗詠集』には、

鶏既に鳴いて忠臣旦を待つ 鶯未だ出でずして遺賢谷に在り（鳳

為王賦）

などの例もある。

歌にはこういうことを詠んだものは少ないが、

讃岐院に加階望み申すこと侍りけるが、二年三年過ぎきければ、

師走の二十日余りのころほひ、詠みて奉りける 位山谷のうぐ

ひす人知れず音のみなかるる春を待つかな（清輔集・四〇五）

は、漢詩文の伝統を受け継いで、谷のウグヒスで不遇であることを言っている。

加階申ししにえ賜らで、うぐひすの鳴く折に うぐひすの鳴く

音ばかりぞ聞こえける花の至らぬ人の宿にも（元輔集・九八。後

拾遺集・春上・二二「春の至らぬ」）

ここには谷とはないが、『八代集抄』に「春のいたらぬとは君の恩沢のあまねからぬ心也。我述懷の泪を鶯のなくにそへてなるべし」と言うように、同じことを嘆いているのである。

10 霞との配合

ま葛這ふ 春日の山は うちなびく 春さり行くと 山峽に 霞

たなびき 高円に 鶯鳴きぬ…（万葉集・六・九四八）

を初めとして、『万葉集』には、ウグヒスに霞を取り合わせた歌が七

首（ほかに霧が一首）ある。

春の野に霞たなびきうら悲しこの夕影に鶯鳴くも

大伴家持

（万葉集・一九・四二九〇）

は作者の絶唱として有名な歌である。

日本漢詩文にも、

春に入りて今幾日ぞ 聞道く数鶯飛ぶと 煙は主人の柳を没し

花は客子の衣に薫ず 桑原腹赤（凌雲集・春日過丈人山莊探得

飛字）

偏に飲ぶ初めて谷を出づることを 謝し絶つ旧の烟霞を（菅家文

草・二・早春侍内宴賦聴早鶯）

霧に咽ぶ山鶯は春に早く還る 中原広俊（本朝無題詩・二・賦

郭公）

などある。この中原広俊の詩は、元稹の

霧を帯ぶる山鶯は啼くこと尚少し（全唐詩・六函九冊・早春尋李

校書。千載佳句・早春・三、和漢朗詠集・鶯・六五には「霧に咽

ぶ」

に拠るのであろう。この取り合わせも中国の影響であろうか。

春山の霧に迷へる鶯も我にまさりて物思はめやも（万葉集・一〇・

一八九二）

のように、霧の中にウグヒスがいるというものもあるが、たいていは、霞の立つ春にウグヒスが鳴くとするものである。

八代集には四首があるだけである（後拾遺集・春上・二三、千載集・

春上・六、千載集・雜上・九五九、新古今集・春下・一〇九）。霞は

遠景であり、鶯は近くに來て鳴く声を愛でるものである。取り合わせとしては、離れ過ぎているのではなからうか。俳諧の発句にも少なく、

鶯に霞のかゝるゆふべかな 士朗（枇杷園句集）

を見いだしたくらいである。しかし、連歌の付け合いでは、直接に関

係のないものでも付けられるから、

朝霞春や山より立ちぬらむ／雪に木伝ふうぐひすの声

後鳥羽院（菟玖波集・春上・二八）

うぐひす告ぐる横雲の空／霞より二十日余りの月出でて

法橋兼載（新撰菟玖波集・春下・四二五）

など、いくつかの例がある。

11 雁との配合

鶯は庭樹に啼けば妾は堪へず 雁は辺山に向かへど君に寄せ難し

巨勢識人（文華秀麗集・中・奉和春情）

色は微かなり沙嶼の草 啼は渉る柳園の鶯 唯帰り飛ぶ雁有り

連連として北に回る声 嵯峨天皇（経国集・一一・早春）

山鶯一曲花樹を離れ 寒雁数行柳城に帰る 法性寺入道殿下

（藤原忠通）（本朝無題詩・四・春夜即事）

など、漢詩では鶯を雁と取り合わせることがある。

和歌にも、

うぐひすの心にはあらで春をだにかりやすくと飛び帰り行く

（躬恒集・四三）（「かりやすぐさ」を詠みこんだ物名歌）

青柳のいとま惜しとてうぐひすの雁の手向けも綴ぢずやあるらむ

（宇津保物語・あて宮）

うぐひすの古巣と言はば雁がねの帰るつらにや思ひなさまし（実

方集・一〇九）

など、多くはないが、例がある。

『千載佳句』に、

鶯は樹頂に帰りて繁声に囀り 雁は天辺に去りて細影斜めなり

陸翬（春日）

がある。中国文学にもあるものである。

連歌俳諧には例を見いだせなかった。菟玖波集・新撰菟玖波集の付け合いにもない。ウグヒスと帰雁とは、近くのものとは空遠くのもの

であるから、一首（一句）に詠みこみにくいのであろう。それに発句の場合は、季重なりにもなる。

12 蝶との配合

漢詩文には、蝶と取り合わせた作がある。

吹台に啼鶯始め 桂庭に舞蝶新し 犬上王（懷風藻・遊覧山水）

紅英落つる処に鶯は乱れ鳴き 紫萼散る時に蝶は群れ驚く

嵯峨天皇（凌雲集・七・神泉苑花宴賦落花篇）

『千載佳句』に、鶯と蝶とを対句に用いたものが

鶯は嫩葉に蔵れて歌ひて相喚ぶ　蝶は芳に礙れて舞ひて前まず

劉寧（春興）

など二例あり、これも中国文学にある取り合わせである。

和歌では原則として字音語は詠まないから、例はほとんどない。近世の契沖に、

梅が香の夢に入る夜はうぐひすも胡蝶となりて遊ぶとやみん（漫吟集・二四七）

など二首あるのを知っただけである。

13 鳴き声の聞きなし

「ウグヒス」ウグヒスという名は、鳴き声によるとする説がある。

鈴木胤は、『雅語音声考』に、「今俗ホオホケキョト云ヲバウ、ウクヒトモキケバ聞ユル也。ストイヒシト云ハ、鳥ニモ虫ニモ多シ。然ルヲ古歌ニ、ウクヒズトノミ鳥ノナクラントヨメルハ、其名ニ因テ、スモジヲモ共ニナク声ニキ、ナシタルナリ。」と述べている。大槻文彦『言海』も、「鳴ク声モテ名トス」とする。幸田露伴も、ウグヒスとも聞けると言う（音幻論）。

右の「古歌」というのは、

心から花の雫にそほちつつ憂く干ずとのみ鳥の鳴くらむ

藤原敏行（古今集・物名・四二二）

である。「憂く干ず」にウグヒスを隠している。この歌では「鳥」はウグイスであつて、自分からウクヒズーウグヒスと鳴いているのである。時代は少し下るが、

いかなれば春来るからにうぐひすの己れが名をば人に告ぐらむ

大江匡房（承暦二年内裏歌合・六）

という歌があり、ここでははっきりとウグヒスが自分の名を告げているとしている。その声はウグヒスとも聞こえるのである。

「ホケキョー」現在、ウグイスの声は、ホーホケキョーと聞きなすことになっている。

鶯同音に法花きやうを夜たか（天正狂言本・鳥せんきやう）が最古例であろうか。近世初期の俳諧や狂歌などにはかなり多く見ら

れる。

鶯のほう法花経や朝づとめ　玄利（犬子集）

銭金でねをさすならば鶯の法々花経も一部八くはん（貞徳百首狂歌）

これに相当する最古の例は、明応八年（一四九九）三月九日に蓮如が高弟の空善に語った、「このうぐひすは法ほき、よとなく也。されば鳥類だにも法をきけとなくに、まして人間にて聖人の御弟子也、法を聞かではあさましきぞ」（空善記）であるという（山内洋一郎氏「ひとくひとく」『国文学攷』45号）。

ホケキョーの実例はここまでしかさかのばれないようである。

『菅家文草』に次の例がある。

鶯児敢へて人をして聞かしめず　谷を出でて来る時妙文に過ぎたり（六・早春内宴侍清涼殿同賦鶯出谷応制）

川口久雄氏は、「妙文」は妙法蓮華経八巻：ここはホーホケキョーという鶯の鳴き声の形容に用いる」と注する（日本古典文学大系）。もしこれが妥当であるなら、この聞きなしは平安初期から行われていたことになる。ちなみに、

時に百花争ひ開き、黄鶯群れ囀る　大江匡房（本朝統文粹・一

三・一品宮仁和寺御堂供養願文）

のような、法会場の描写に鶯を点出することがあるのも、あるいはこれとかわるのであろうか。

さらに古くは、『出雲国風土記』に、嶋根郡の法吉郷について、「神魂命の御子、宇武加比売命、法吉鳥と化りて飛び度り、此処に静まり坐しき。故、法吉といふ」という地名起源説話がある。この法吉鳥というのはウグイスであるという説がある。すでに江戸後期の狩谷極斎がこのことを述べている（箋注倭名類聚抄）。新村出氏は「上古にすでにホーホケキョーというふうな人に聞き取られていたことは事実である。：ホホキとかポポキとか聞こえるのは争えないところで、アイヌ語の方にもウグイス属の名前にポポキとかポポコと名づけられた鳴き方があるので、それとも思い合わされる。」（語源をさぐる）と言う。そうすると、奈良時代からホケキョーになる可能性はあったことになる。

「ヒトク」歌では、鶯はヒトクと鳴き「人来」の意味を持たせることになっている。

梅の花見にこそ来つれ鶯のひとくひとくと厭ひしをる

詠み人知らず（古今集・誹諧・一〇一一）

に始まる。

このヒトクについて、亀井孝氏は、「とにかく、一応、推定しうることは、古代から中世のある時期まで、うぐひすのなき^ぎゑは、[p-t]のかたちでとらへられてきたものであらうといふことである。」「見方によつては「ピーチク」と「ひとく」とは、おなじ——identical——なのである。」とする（「春鶯轉」『日本語のすがたとこころ』（一）音韻」所収）。

この時過ぎたるうぐひすの、鳴き鳴きて、木の立ち枯れに、ひとくひとくとのみいちはやく言ふにぞ、簾おろしつべくおほゆる。

（蜻蛉日記・中・天禄二年六月）

これによれば、ヒトクという鳴き声は「いちはや」いのである。

藤原清輔は、ヒトクを

鶯はなきはてに、きり声になくことあり。それはひとくひとくとなくやうにきこゆればかくよめる、或物にも、かくぞ見えたる

（奥義抄・下）

と説明する。これはホケキョーではあるまい（山内洋一郎氏・前掲論文）。

この「きり声」というのは、『顕注密勘』には「鶯はなきはてに、きりこゑに、まことにはやくなく事有」とし、『両度聞書』には「鶯の人をそれてとびなきするが人くくといふやうなれば」とする。いわゆる地鳴きであらうというが、あるいは谷渡りか。

「チヨ」ウグヒスの声をチヨとも聞くこともあったようである。

うぐひすも千世をや契る年を経て変はらぬ声に春を告ぐらむ

釈阿（藤原俊成）（千五百番歌合・四〇）

これは毎年変わらぬウグヒスの声を千世としたのであらうが、窓近き竹の葉風も春めきてちよの声ある宿のうぐひす

平貞時（玉葉集・春上・五二）

珍しき竹の台の春に会ひて千世を語らふうぐひすの声

藤原実任（文保百首）

のように、「ちよの声ある」「ちよを語らふ」など詠んでいることからすると、チヨと聞くこともあったのであらう。先の『千五百番歌合』の歌も、それを意識しての詠ではないか。山口仲美氏は、これをチャツチャツという地鳴きの声と説明する（「ホホウホホウもほめことば」『ちんちん千鳥のなく声は』所収）。

「ツキヒホシ・三光」初期俳諧には、

鶯は月星日をやかぞへ歌 良徳（犬子集・誹諧発句集）

鶯の来鳴や月日ほしか梅 之次（鷹筑波集・二）

俗語には日月星となく鶯を三光を鳴と云也（蠅打・一）

のように、ウグヒスの声を「月日星」などとするものがある。亀井孝氏は、第三の例をもつてピーチクとつながるものとされるが（前掲論文）、数点の貞門の俳書で得た例は、月日星とするものが多い。それではピーチクにはなりにくいのでないか。

「月星日」は三光である。したがって、

三光の音は鶯の秀句哉 重方（毛吹草）

という発句もあり、

例年より花も春めきて咲初、鶯殊更に囀る中に、三光ありくと、声のあやざれしたる鳥の、柳の枝に高ふとまつて、日毎に爰をさる事なし（本朝桜陰比事・三・九）

やあ是に鶯が有、あれは世間に重宝する、三光とやらいふ鳥であらふ（続狂言記・鶯）

などともある。最後の例からすると、ウグヒスを三光とも言ったのであらうか。

14 結語

これまで述べてきたところからは、日本人のウグイスについて感じ方は、中国の影響によるものが多いということになる。古代の日本人はウグヒスなどに美を感じていなかった、中国文学などによってそれを興ずることを教えられたのであらう。その後の一千余年の間に、それらの全体が、日本的なものに感ぜられるようになり、次第に中国の影響とは思わなくなったのであらう。

（受理年月日 一九九八年九月三十日）